

山崎孝明〔編〕

POST(精神的サポーターセラピー)を描く

——さまざまな現場・対象における実践

A5判並製・日本評論社

2025年8月刊

定価3,080円(税込)

評者＝諏訪淳哉(しんよこメンタルクリニック)



本書は、岩倉拓ほか(2023)『精神的サポーターセラピー(POST)入門』(金剛出版)(以下、前著)に次ぐ、POST本の第2弾である。前著を理論編とするならば、本書はその実践編にあたる。第I部ではPOSTの本質を描き出し、第II部では教育・医療・福祉・産業・学生相談など領域別の実践が、第III部ではトラウマや発達障害、親面接など支援対象別の実践が紹介されている。多様な現場に息づくPOSTの姿が重層的に描かれた一冊である。

ところで、POSTは精神分析に起源をもつ臨床実践として新たに名付けられたものの、その中身は決して新奇ではない。むしろ、これまで多くの臨床家が日々行ってきた営みを再定義するものである。前著刊行以降、この「わざわざ定義づける」こと自体をめぐる賛否が交わされた。こうした背景を受け、編者・山崎氏による第1章「POSTの外延」では、概念の定義や適用範囲、定義づけの意図が丁寧に論じられ、本書全体の総論的役割を担っている。

山崎氏は、POST概念の背後には「アイデンティティ・ポリティクス」があると述べる。多くの臨床家が自らの実践を「精神的サポーターセラピーではないのかもしれませんが……」と恐縮して語る現状を踏まえ、等閑視されてきた実践を議論の俎上に載せ、精神分析の知を広く活用する土壌を整えようとしたのである。POSTは、心理臨床や精神分析のコミュニティにおける臨床家たちの切実な必要から生まれた概念だといえる。

各章で描かれるPOSTの実践は、いずれも中堅の臨床家による。読むうちに、POSTのイメージや定義が執筆者ごとに異なることに気づくが、それこそが本書の魅力でもある。POSTは理論から導かれた実践ではなく、精神分析的理解をもつ臨床家たちが現場で自然に行ってきた営みに事後的に与えた名だからだ。執筆者たちは精神分析の知を自らの現場にインストールし、融通無碍に活用している。その実践から導かれるユー

ザーの変化は、起源である精神分析に劣らぬ深みと広がりを感じさせる。

これまでも精神分析を日常臨床に活用する趣旨の書は少なくなかったが、POSTという名が与えられたことで、こうした実践が学会や論文で正当に語られる機会が増えるだろう。“大人”である精神分析に対し、かつて“子ども”と見なされてきた実践にPOSTという名を与えることで、参政権を付与したとも言えよう。

繰り返しになるが、POSTは実践が先にあり理論が後づけされた概念である。その意味で、本書(実践編)を先に読み、理論編である前著をあとから読むのも一興である。POSTは、精神分析を学んできた臨床家はもちろん、関心をもちながら数居の高さに躊躇いを感じてきた人にも開かれた実践である。本書を通して、多くの臨床家が精神分析的理解の有用性とその現代的なかたちを実感されることを期待したい。そのうえで、評者を含め多くの臨床家はその参政権を行使すること——すなわちPOST実践を言葉にすること——が、精神分析コミュニティにとって、ひいてはユーザーのために求められているだろう。